

第二十二回 横光利一俳句大会 入賞作品

【一般の部・特選】 九句

横光利一俳句賞

地下鉄の窓の漆黒原爆忌

金澤諒和 大分市

(浅井慎平選) 悲劇的過去と現在とのイメージの出会い、胸を打つ。

(野中亮介選) 地下鉄の漆黒の窓。そこに映っているのは自分の顔なのか。核兵器で亡くなった人々の無数の顔なのか。

大分県知事賞

サングラスはづし酒宴の主賓席

藤井彰二 福山市

(野中亮介選) サングラスに粹なシャツを着て現れた男。誰だろうかと言ふ面々。それがまさか主賓であったとは。

宇佐市長賞

炎天の影つれ歩く草田男忌

岸原邦代 岡垣町(福岡)

(浅井慎平選) 炎天の影と草田男のイメージとが重なった。心象と目に映る世界が無理なく言葉になった。

宇佐市議会議長賞

ずいき炊く母の厨は薄暗く

石井明美

津久見市

(野中亮介選) 食糧難の時代、よく食せられていた芋茎。それを家族のために美味しく煮る母の背中は悲しくも温かかった。

宇佐市教育長賞

そぞろ寒電気は笑うように点く

芝野麦茶

蕨市

(浅井慎平選) 笑うように点く電球に気づいた作者の目、そうだったのかと感心しました。

大分県北部振興局長賞

百号の画布に色置く今朝の秋

井上寿子

直方市

(野中亮介選) 大作に挑まんとスケッチを重ねて構想を練る作者。いよいよ真つ新たなカンバスに筆を降ろす瞬間の緊張感。

豊の国宇佐市塾賞

芋の葉の大きな村に住みなせり

齊藤いさを 大津市

(野中亮介選) 都会に比べてみれば何かと不便な田舎住まいだが、自然に溢れた環境を誇る気持ちが滲む。

浅井慎平選者賞

曼珠沙華遺影より母うつくしき

睦ほたるこ 大分市

(浅井慎平選) 言葉使いの隅々にまで、母への思いの深さが感じられた。儚く美しく鮮烈。

(野中亮介選) 遺影にはこれを選んでね、とお気に入りの一枚を渡す母。写真には表せない母の美しさが作者の心にはある。

## 野中亮介選者賞

青簾アイロン台の薄き焦げ

米満幹音

鹿屋市

(野中亮介選) 薄い焦げ跡から家族のためにアイロンをかける頑張り屋のお母さんが浮かぶ。青簾が若い家庭を暗示させる。

【中学生以下の部・特選】 九句

大分県知事賞

うめの色ほしてもっとあかくなれ

東 珀花 ひがし はな

佐田小五年(宇佐市)

(浅井慎平選) 素直な気持ちがあるまま句になった。

宇佐市長賞

小説のページを静かにめくる秋

神田 杏 あん

上野ヶ丘中三年(大分市)

(野中亮介選) 過激な描写の小説ではないだろう。心の奥に染み込むようなストーリー。読み進むにつれ秋も深まる。

宇佐市議会議長賞

次の日は木と石だけの雪だるま

矢野寧々果 ねねか

明治小六年(大分市)

(野中亮介選) 手を真っ赤にして作り上げた雪だるまなのに次の日は消えてしまっていた淋しさがよく出ています。

宇佐市教育長賞

蝉が泣く後ろから僕が忍びよる

恒住修斗 つねずみしゅうと

西部中一年(宇佐市)

(浅井慎平選) 鳴く蝉が泣いているのだと作者は気づいたのだろうか、面白くかない。

大分県北部振興局長賞

めをあけたプールのそこはひろかった

森本和夢 ゆめ

駅館小一年(宇佐市)

(野中亮介選) うまく泳げるようになったのでしよう。目を開けてみたらプールの広さにびっくり。冒険心を大切にね。

宇佐市民図書館協議会長賞 ソーダ水机の上の水たまり

上平真之介 かみひら 安岐中三年(国東市)

(野中亮介選) 机の上の水たまり、何だろう？それは飲み終わったソーダ水のコップの水滴の跡。夏も終わろうとしている。

豊の国宇佐市塾賞

夏の水キラキラ光る夜の星

小松 夢 八幡小三年(宇佐市)

(浅井慎平選) 自然がつくる情景をよく観察している。

浅井慎平選者賞

つかもうと入道雲に手をのばす

高持さくら 駅館小六年(宇佐市)

(浅井慎平選) 誰もが一度はつかもうとした入道雲、その思いが秀れた一句になった。

野中亮介選者賞

夏の日にじいちゃんが吹くハーモニカ

青松潤斗 まさど 竹田南部中三年(竹田市)

(野中亮介選) ハーモニカの音色は郷愁を誘う。おじいちゃんが吹く音色は尚更だ。終戦日を迎えようとするある夏の日。

(浅井慎平選) じいちゃんは若い日からハーモニカを吹いてじいちゃんになったんだね。